
彼の名前

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の名前

【Nコード】

N5290P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

名前も知らない人に、心を奪われた。そんな女の子たちの物語。自サイトでも公開中。

1・彼の名前

「今度の飲み会にさ、由利も連れて来ていいかな」

そんな台詞を修次が言い出した時、流石の私もアイタタタと思っ
た。

「ああ。修次の大学の友だちだろ？ いいよ連れて来いよ」

そんな伊勢の相槌を苦々しく思いながらも、それでも次回の飲み
会は何がなんでも『絶対に出席！』と心に誓った私だったのだ。

けど、誓ってしまう事って、大概なぜか叶わない。

バイトを急に休む子がいて（まあ、よくあることだけど）、私は
予定よりも二時間以上も長くお店で珈琲をいれている事になってし
まったからだ。

お店をバタバタと飛び出して腕時計を見ると、時は既に九時を回
っていた。

バイトも、飲み会も地元だった。

だから走れば、十分はかからないと思う。

六時半から始まった飲み会は、もうそろそろ終るか、まだ辛うじ
てお店にいるか、とても微妙な時間だった。

全く今日に限って、携帯を家に忘れてきちゃったんで、まだ修次
たちが店にいるかも確められてなかった。

目的地の居酒屋が視界に入る。

私は、タタタタッと二階の居酒屋めがけて階段を上がって行く。

すると、見慣れた面々がお店から出てくるのが見えた。

「ああ〜！ 伊勢！」

丁度出てきた、伊勢に声をかける。

「よお。麻貴。オマエどうしたの？ 来ると思ってたのにさ」
呑気に伊勢が、私に声を掛けてきた。

「うん。バイトでちよつとね。で、みんな、もう帰るの?」

伊勢の後ろにも、知った顔がゾクゾクと見えた。

みんな、ドンドコと階段を下りてくる。

「麻貴、おっせー」なんて私に声を掛けながら、赤い顔した友だちが階段をタカタカと下りていく。

私はその階段の端に立ちながら、二階から下りてくる伊勢を待っていた。

でも、修次の顔は見えない。

「麻貴、二次会から出るか? あ、でも」

「でも?」

嫌な予感。

「修次は、先に帰ったけど」

「ウソッ」

まさにガーンという音を立てて、伊勢の言葉は私の脳みそに響いていった。

帰ったのか。修次。

「ああ。もしかして、由利ちゃんとかいう子と一緒に?」

そうだ。そうに違いない。

きつと由利ちゃんとやらの門限とかなんとかで、修次は早く帰ったに違いない。

由利ちゃんとやらって、お嬢様なんだ!

コッソ。

頭に軽い衝撃が走る。

ひつ、と驚いて隣を見ると、見た事もない背の高い男の子が、私の頭を叩いていた。

「『ちゃん』付けするな」

そう言つと、カタンカタンカタンと階段を下りていった。

だ、だ、誰?

伊勢に、目で訴える。

「修次は風邪。で、途中棄権」
風邪？

「で、今、麻貴の頭を小突いたのが由利。ちなみに由利は苗字だよ」
そう言っ、由利クンとやらの後に、伊勢はついて下りていった。

……男？

由利は。

で、苗字？

由利は。

修次の彼女、じゃない？

ぷぷぷって笑って、『なーんだ』なんてほっとしながら、私も力
タンカタンと階段を下りた。

「二次会行くか？」

伊勢がみんなに声をかける。

二次会か。

修次はいないけど、けど。

「あんたさ」

ぎよっとして、声のほうを向くと、由利とやらが私の隣に立っ
ていた。

「な、なんでしょ」

自然なふりしをて、手を頭の上に乗せて、さりげなく、脳天を
カバーしてみたり。

「あんた、多分。修次のことが好きなんだろうけど」

ズバリと、由利とやは、言ってきた。

「あいつ、大学に彼女がいるから止めたほうがいいと思うよ」

そんな地雷踏み踏みな台詞を、由利とやはスラスラと言いやが

る。

「……由利とやら。あんた、知らないと思うけど」
私だって負けてない。

「私は、随分前に修次に振られてるんだから。私が片想いだって
こと、みんな知ってるんだから。だから、」

畜生。

泣くかつ。

こんな初対面の、由利とやらの前で。

「だからっ！ 彼女がいようがいまいが、どっちにしろ私に望みは
無いんだよ」

くー。

久しぶりに、こんな自爆な台詞を自分の口から出してしまった。
頭で分っていることだけど、言葉にすると十倍キツイ。

だから奥歯をギュッと噛んで、涙が出るのをグツと我慢する。

由利とやらの、バツカヤロー！

彼女がいるとか、いないとか。

『麻貴は、いい友だから』とか、なんとか。

そんな言葉で人を好きになるのが止められるんなら、とつくに止
めてるワイ。

この、ボケがつ！

「そっか。悪かったな」

その言葉と共に、由利とやらの大きな手が、また私の脳天めがけ
て振られてくるのが見えた。

コイツ！

また私の頭を叩こうとするのかよ？
って思ったら。

由利とやらの手は、私の頭の上で優しく動いた。

「まあ、辛いだろっけど。がんばれや」

そんな、急に優しい事を言いやがって。

由利とやらは、私から離れていった。

そんなんで残された私は、この頭の天辺の妙ちきりんな温かさに戸惑って、呆然と立ちつくしちゃったりしていた。

「じゃあ、俺帰るわ」

そう伊勢に声を掛けると、由利とやらは一人駅に向って歩き出した。

大きなシルエットが集団から離れて、動き出した。

「麻貴。オマエはどうする？」

伊勢が聞いてくる。

「私は」

そう言いながら、由利とやらから目が離せない。

「ハイハイ。お帰りね」

そう言って、伊勢が私の背中をトンと押した。

よろよろと、私の体が少しだけ駅のほうに向う。

「麻貴の、新しい出会いに乾杯」

伊勢のヤロウが、ウインクなんてしてくる。

「バカヤロウ。覚えとけよ」

べーってしながら、私は由利とやらの歩く方向に体を向けた。

なんだ、なんでだ？

だって。だってさ。

なんか、あいつ、気になるじゃん。

気になるって気持ちに、理屈なんかはないんだよ。

人ごみには絶対に紛れそうにない、修次とは違うでっかい背中を見つめる。

そして

『あの背中を叩くと、いい音がするに違いない！』
なんてことを考えながら

私は由利に向って走り出していた。

2・QUE SERA SERA（ケ セラ セラ）

カウンターの中に座って大学のレポートに頭を悩ませている私の視界には、妙な三人組みの楽しい談笑の様子が映っていたのであった。

「やっぱり『ダイヤルM』が」

と、三人の中で一番個性の無い、無害そうな男の子がそう言う
「絶対『裏窓』！ グレース、ラブ！」

と、元気一杯の女の子が言う。

すると、三人の中では一番賢そうに見える男の子が
「グレースもいいけど、ドリスの歌声も捨てがたい」
なんて言い出した。

「でも、グレースの色気には敵いかなわな癖して」
そう、女の子が言う。

「実際に口説かれたなら、グレースだろうけどな」
と、『ドリス』を推していた男の子が言った。

映画の話？

カウンターのこっちにいる私にも、ようやく三人の会話の内容が見えてきた。

夕方近くのこの店は、いつも決まって空いていた。
今も、お客さんといえばあの二人で。

のんびりというか、まったくとした空気が流れていたのだった。

しばらくすると、お盆を持って、『グレース ラブ』な女の子

麻貴が戻ってきた。

「木谷きやちゃん、珈琲二つ注文入りまあす」

そう言いながら、麻貴は伝票に『コーヒー2』と書き込んだ。

元気な割には、落着いた綺麗な字を書く。麻貴は。

「あの二人、麻貴の友だち？」

まあ、そうだろうけど、一応聞いてみる。

「うん。一人は友だちで、一人は好きな人」

そう言いながら麻貴は、珈琲の豆を出して、ミルでひき始めた。

一人は友だち？

で、一人は好きな人？

どっちが、どっちだあ？

二人の男の子を少し疲れた目を細めて見た。

無害な方は、なにやら本を広げ熱心にしゃべっている。

もう一方の、賢そうな方は、その本を覗き込みながら。

……ながら。

あつ。

こつちを見た。

目があつてしまう。

思わず逸らす。

じつと、見すぎていたかしら。

あはは、と少し反省する。

麻貴はというと、珈琲をゆつくりと丁寧にかつ大胆に、ドリップし始めた。

うちは、注文が入ってから豆をひいて珈琲をいれるから、時間がかかるけど味の評判はいい。

私のじいさまが道楽でやっているこの店に、ある日ふらりと迷い猫の様に麻貴はやってきた。

そしていつの間にかバイトで働き出して、驚く速さで珈琲をいれるのが上手くなっていった。

麻貴の他にも、何人かアルバイトの女の子はいるけど、バイトで珈琲をいれられるのは麻貴だけだ。

私もいれられるけど、多分私よりも麻貴のほうが上手いと思う。だから、麻貴がバイトの時は、私は珈琲をいれるのは麻貴に頼ん

でしろう。

麻貴の夢は『私もいつか、こんなお店を持つんだあ』らしい。孫だからって手伝っている私とは、全くもって違う。

私と同じ年なのに麻貴はもう自分が進みたい方向を見つけていた。

そういつのつて、正直、少し焦る。

なんて思っていたら、ふわりと、いい香りが漂ってきた。

まるやかで、ほろ苦く、そして甘い、魅惑の香り。

両親共働きの一人っ子、そしてじいさまっ子の私は、この香りの中で育ったようなもの。

宿題も、テスト勉強も、受験勉強も、このカウンターでしていた。

ランドセル背負って、裏口から入り。

学生カバン持って、裏口から入り。

そして、真っ直ぐにじいさまの居るカウンターを目指した。

麻貴のいれる珈琲は、そんな懐かしい記憶を呼び起こさせるものだった。

そんな気持になりたくて、麻貴に珈琲をいれるのを任せてしまうってこともあった。

だから、将来麻貴がお店を持ったとしたら、私はそこに入り浸ってしまいかもしれない。

だって、その頃は。

きつとじいさまは居ないから。

カチャカチャとカップを用意する音が聞える。

麻貴が二人分の珈琲を、トレイにセットしだしていた。

男子二人組は、まだ本を見ながら話している。

セットしたトレイを持って、麻貴が二人組の方に歩き出した、と、その瞬間。

賢そうな方が、麻貴のことを見た。

こっちか、麻貴の好きな男は。
それは、もう直感。

ぱっと、その男の子の瞳に映る麻貴への眼差しは、なんともいえず優しい光を帯びていたから。

だから、『ああ、彼は麻貴のことが好きなのね』とわかってしまった。

麻貴は幸せ者だね、と思うと、同時に。

少し残念だった。

だって、そっちの彼の方が、断然私の好みだったから。

麻貴はまた、二人と話している。

彼氏か。

いいなあ。

まあ、羨ましがってもしょうがないけどね。

二人組が帰り仕度を始め、ガタガタと椅子を引く音がした。

「麻貴の彼、かっこいいね」

珈琲を下げに行こうとする麻貴に声を掛ける。

「えっ？ 彼？」

麻貴が笑う。

「彼じゃないよ。振られてんのにい」

麻貴がちらつと舌を出す。

「ウソウソ。彼も麻貴のことを好きだと思っよ」

だって、絶対にそうだってば。

「まさかあ。修次があ？」

ふーん。『修次』くんって言うのか、あの彼。

と、私が思ったその時。

無害な方が、手に持っていた本をバサバサバサと床に落とした。

「あっ、修次！ もうー！ 本が落ちてるう！」

麻貴がパタパタと無害な方に駆け寄る。

えっ？

無害な方が『修次』くん？

つてことは？

「いくら？」

賢そうな方が、レジの前に居た。

瞬間移動？

びっくりよ。

「ご一緒に、六百円になります」

賢そうな方が、すっきりとしたお財布から千札を出してきた。

私は年代物のレジを開けると、そこからガチャガチャと百円玉を四枚とり出した。

ちらりと麻貴の方を見ると、『修次』くんと、笑いながら二人でのんびり本を拾っていた。

あっちが麻貴の好きな『修次』くん。

つてことは、この三人つて。

矢印が一方通行な三人な訳？

そう思いながら、お釣りの四百円を賢そうな男の子の手に渡す。と、その時。

「The Woman Who Knew Too Much」

賢そうな男の子が、英語を話してきた。

「はあ？」

「何事も、知り過ぎない方が身の為だつて事」

その、賢いだけでなくて、色気のある顔にドキリとする。

そして、彼は去り際に不敵な笑いを私に向けてきた。

ギイと重い木の扉が開く。

外の空気が入ってくる。

「あつ、^{まゆみ}檀！待てよ」

「じゃあな」と麻貴に言いながら、私にペコリと頭を下げ、本を抱えた『修次』くんも外に飛び出していった。

「ま、まゆみ？」

麻貴の顔を見る。

「ああ、あいつね。伊勢いせ 檀まゆみっていうの。女みたいな名前だヨね」
けらけらと笑いながら、麻貴が空のカップを二つ載せたトレイを流し場に運んでいった。

でも私は。

『ホント、女みたいな名まえだねえ』なんてことを言っつて、伊勢つて人を笑おうだなんて、ちっとも思えなかった。
「やばい。キタかも」

ドキドキと凄じ速さで動き出した心臓に手をあてて、溜息をつく。

知りすぎていた女、私 木谷きや 薫かおるのところに。
こうして恋の神様は、突然にやってきたのだった。

3・dandelion

友だちができにくいっていうのは、もちろん私の側の問題もあるけど、周りの態度や偏見だって、少しは関係してくると思うのよね。

なーんて、結局は自分の人間関係の未成熟さを、どこか人のせいにしてる私なんだけど。

「ねえ、由利。今晚暇？」

数少ない友達の由利に声を掛ける。

「バイト」

由利は、今日締め切りのレポートを出すために、私の優秀なるレポートをカリカリと書き写している、

この教授のレポートは、ともかく出せばOKってやつだったから。そこら辺、由利は抜かりなく選んで単位をとっているようだった。

それが良いんだか、悪いんだか、そこはまあ色んな見解があるとは思っけど。

「バイトって、また、現場？」

「うん。今日は、京橋で」

ふーん、と思いながら、由利からの賄賂の煙草に火をつける。

まあ、由利は。

どこからどう見ても、体だけは丈夫そうなものね。

ああ見えても煙草を吸わない由利に気を使って、私は煙を人気の無いほう向ってふうと吐いた。

少しグレイがかった白い煙が、私の体から出て、学食の空気に溶けていくのをぼんやりと眺める。

禁煙しようとか、軽いのに替えようとか。

私も、努力はしているのだけど（まあ、由利に言わせると『努力が足りん』ってことみたいだけど）。

でも、ダメなんだよね。

親にも嫌がれながらも、家族で一人喫煙している私。

ストレスが多いのかなあ。

それとも、単に煙草が好きなのかなあ。

それに煙草ないと、どうも間が持たないのよね。

「なに？ また映画かなんか？」

由利が、パサツとレポート用紙を捲りながら聞いてきた。

「うん。例の如く試写会。二人分あるから」

親の仕事の関係で試写の葉書や券はよくもらうのだ。

由利に付き合ってもらうこともあれば、妹と行くこともあったり。

今日は妹はおデートだそうで、姉は相手にしてもらえなかった。

でも、由利が行けないなら、一人で行くかなあ。

「ああ、だったら俺の友だちで、映画好きな奴がいるから、そいつと一緒に行けば？」

由利が、そんなことを言ってくる。

「……由利の友だちって、『男』でしょ？」

「そうだけど？」

うーん。男かあ。

「この大学の人？」

「そうだけど」

「彼女いる人？」

「いないんじゃないか？」

うーん。

いたらいたで面倒だけど、いなかっただらいいないで、これまた面倒。

またそれが、同じ大学とくれば。

「そのヒト、面倒なヒトじゃない？」

由利がレポート用紙から顔を上げる。

一重の大きな瞳が、笑っている。

「アイツ？ 全く面倒じゃないよ。……ただ」

「ただ？」

「一筋縄では、いけない男だけだね」

そう言つと、再び由利はレポート用紙に向いだす。

一筋縄ではいかない由利が言うんだから、相当の変わり者かもしれない。

変わり者は、変わり者を呼ぶてか？

でも、由利がそんな表現をする男に興味を持った。

見てみたい気もする。

それに私は、由利に対して全面的友情と信頼を寄せていたりするもんだから。

色んな面倒と、興味を天秤にかけると、少しだけ興味の方が上を行つた。

ともかく、そんなこんなで。

私は、由利お勧めのその『一筋縄ではいかない』男と一緒に、映画に行くことを選んだのだった。

『直接、会場の入り口で待ち合わせでいいだろ？』って由利が言うから『OK・OK』なんて軽く答えて別れたものの。

私はその由利の友達の名前を聞くのを、すっかり忘れてしまつていた。

今日の試写会は、六時半からで、私たちはその十分前に会場の入り口で会うことになっていた。
しかし。

「名まえを聞くとか、携帯の番号を聞くとかすればよかったあ」
続々と人がやって来る。

どんどん会場に人が入っていく。
半端じゃない人ごみを見ていると、どこにどう視線を向けて探せ

ば（って、そもそも探しようがないんだけど）良いのか分らなくなってきた。

そして、通りすがりの人が、私のことをじろじろ見ているような気持ちにもなり（それは由利に言わせると、自意識過剰ってことなんだけど）ここで待つのが段々イヤになってきた。

やっぱり一人で行った方がよかったかなあ、なんて思ったその時。

「きみ、由利の友だち？」

タンポポの綿毛みたいだな、ぽよよんとした少年（青年？）が私の前に立ちはだかった。

「そうだけど、あなたも由利の友だち？」

そう私が聞くと「うん」と、その少年は嬉しそうに頷いた。

映画は、大ヒットコメディの続編の映画で、よく「二作目は不調」って言うけど、これは中々よかった。

単純に楽しめて、心から笑ってしまった。

エンディングのクレジットが流れるのを見ながら、『この先のタンポポ少年にご飯とか誘われちゃうのかしら』と思うと気が重くなった。

でもってご飯を食べに行くと、なんだか次回の約束なんかをほめかされたりして。

色いろ考えると、頭の中がグルグル回って。

……煙草が欲しい（いや、今すぐは無理って分っているけどね）。

それにしても、この少年は、私と同じ大学生なのかしら（コーコ一生に見えます）。

淒く、疑問。

ん？

突然バサリと隣の人のコートがずれて、私の膝の上にゴソリとかがってきた。

隣を見ると、サラリーマン風の男の人が座っていた。

ああ、気がつかないんだあと思い、コートをそっちにずらそうと思った時。

ウソッ。

そのサラリーマン（もう、『風の男』は省略！）の生暖かな分厚い手の平が、私のスカートの中にぬっと入ってきた。

こ、こ、こいつって！

「行くよ」

まだまだ長いクレジットが流れる中、タンポポ少年が私の腕をぐいっと掴む。

ひゅっと私が立ち上がった拍子に、サラリーマンのコートがバサリと床に落ちた。

それをすかさず、タンポポ少年が拾う。

そして、コートと私を掴み持ったまま歩き出す。

「あつ。コート」

サラリーマンの声がした。

するとタンポポ少年が

「返して欲しければ、会場の係員のところまで取りに来て下さい。

僕はこれを『チカンの落し物です』って言って届けておきますから」

タンポポ少年は、サラリーマンに有無を言わせぬ強い口調でそう言つと、私の腕を掴んだまま、ぐんぐんと歩き出した。

薄暗い会場のせいかな、はたまた何かの魔法のせいかな。

私の目線と同じ高さにある、そのタンポポ少年の横顔が、とつても遅く見えた。

メチャクチャかつこよかった。

掴まれた腕のところから、凄いエネルギーが私のハートに流れ込んでくるのが分る。

タンポポ少年のくせして。

でも、彼はそれだけじゃないヤツ。

底知れない何かを感じた。

由利の見解はやっぱり当たっている。

場内を出てすぐのベンチに、タンポポ少年がサラリーマンのコートを置いた。

「まあ、少しは懲りただろうから。今回は見逃すか」

なんて言った。

「怖かったよね。悪かったね。僕の席と変えとけばよかったね」

私は、声も出でずにぶんぶんと首を横に振った。

そんな、アナタが謝る事じゃないじゃない。

「帰りは、送ったほうがいい？ それとも一人で帰れる？」

「……一人で、平気」

「そつ。じゃあ、僕はこっちだから。またね」

そう言つとタンポポ少年は、一人都会の明かりの中に消えていった。

「由利！」

翌日、由利を見つけて、大声で叫ぶ。

「よお。映画どうだった？」

「うん、結構面白かった。じゃなくて」

由利が、大笑いする。

「ああ。アイツのこと？」

「そつ。アイツのこと」

「イイヤツだろ？」

「悔しいけど。イイヤツだった」

由利が、ニヤニヤと笑い出した。

「で、なんか俺に用？」

由利のヤツ。

私が、タンポポ少年にハマルって、きつとお見通しだったのね。そう思うととっても悔しいけど、けどそんな意地であんない男

を逃したら、絶対に後悔しちゃう。

「名まえ。名まえ教えて！ あのタンポポ少年の」

由利は『タンポポ少年』の単語にエライうけて、ゲラゲラと笑い出した。

「名まえは、『修次』。『小沢 修次』だよ」

由利から聞いた名前を頼りに、『小沢 修次』を探して私は大学中を走り回る。

知らない人に話し掛けるのが苦手だから、とか、実は非常に小心者だとか、そんないつもの私はどこかにすっ飛んでしまうほどの行動力だ。

ともかく、彼に会いたくてたまらない。

誰よりも早く、彼をつかまえない。

風を切って走る私の耳もとで父親譲りの明るい色の髪が、北風に吹かれて、揺れた。

4・彼女の名前 くジーザス！ジーザス！

いつものように、私はお店のカウンターの中に座って大学のレポ
ートに頭を悩ませていた。

そしていつものように夕方この時間はお暇なひと時でして。
けれどそんな暇な空気とは関係なく、いつも元気ハツラツなアル
バイター少女の麻貴が私たち二人の為の珈琲をいれてくれた。

「木谷^{きや}ちゃん。マスターの風邪、よくなった？」

麻貴が訊いてくる。

マスターは私の祖父であり、そしてこの珈琲店のマスターでもあ
った。

「うん。もうすっかりいいよ」

このところの寒いんだか暑いんだかよく分からないお天気のせい
で、じいさまは寝込んでいたのだ。

「そっかあ。マスターは良くなったのねえ」

そう言つと麻貴は「そっか。うん、よかったあ」と言つてにこり
と笑った。

ギイと重い木の扉が開く。

ひゅうという風の音とともに、修次君がお店に入ってきた。

「……あ、いらっしやいませ」

「こんにちは」

修次君は、優しい笑顔でそう言つと「麻貴、ちょっといいかな」
と話し出した。

これはちよつと私は席を外したほうがいいかな、と思いきりげな
くカウンターから出て、台布巾を持ちテーブルを拭き出した。

麻貴と修次君は不思議な関係だ。

振られた女の子とその女の子を振った男の子。

なのに、二人はとても仲がいい。

「……私には不可能な関係だわ」
辛くて、耐えられない。

「え、うそっ！」

突然の麻貴の大きな声に驚く。
どうしたのかな？　と思って耳をそばだてると「そんな、伊勢も
だなんて……」と麻貴が言う。

途端に顔が赤くなる。

伊勢 檀君は、麻貴や修次君の友だちで、実はただいまのワタク
シの片思いのお相手だったりもするのだ。

麻貴がこつちを見た。

目があつてしまう。

思わず逸らす。

そして私は机拭きに命をかけているかのように、麻貴に背中を向
けた。

「木谷ちゃん！ん！」

麻貴が呼ぶ。

「……ん？」

さりげない様子を装いながら私は返事をする。

「あのね、木谷ちゃんにお願いがあるんだけどなあ」

振り向くと、無邪気な顔をした子犬が二匹。

くりくりの四つのおめめで、私のことをじっと見ていた。

「うーん、これは。……泥棒にでもなった気分よお」

修次君から渡された鍵で玄関を開けると「おじゃまします」と小さな声で挨拶をした。

「伊勢、熱出して寝込んで。でも、家族も旅行でいなくて」

「朝は僕が行ったんだけど、夜はバイトがあるから麻貴に頼もうと思った」

「うん。実はもう一人寝込んでいる奴がいて、そっちにも行かないといけなくて。だからお願い。木谷ちゃん、伊勢の看病を頼んでもいい？」

どうも、今回の風邪は男の人ばかりに感染するようである。

「ええと。キッチン、キッチン」

麻貴に教えてもらったその場所へと向かう。

薄暗い廊下のその突き当たりまで歩く。

引き戸になっているそこをあけると、麻貴の教え通りにキッチンがあった。

さて。お次はお料理。

「病気の時の伊勢の定番の食事メニューっていうのがあって」

そう言うത്麻貴と修次は「あれは永遠のワンパターンだね」と言って笑い出したが。

スーパーのビニール袋からこそそとその材料を取り出す。人参。

玉ねぎ。

小松菜。

卵。

そして。

「これ、初めて買ったわ」

レトルトのフカヒレスープのもと。

伊勢 檀君は、病気の際は野菜をたくさん入れたフカヒレスープをお召し上がりになるそうだ。

「では、作りますか」

最小限の照明をつけて、料理をする。

まあ、料理といっても、野菜を細切りにしてお鍋にいれてお水を入れて煮て、そのフカヒレのレトルトを入れて最後に卵をとじればいいんだから、料理なんて言えないレベルだけど。

これくらいのことでもいいのなら、毎日だってできちゃう。

……毎日だってできちゃう？

「こらこら。一体何を考えているのよ」

伊勢君の友だちは、修次君や麻貴であって。

私はその代打でしかないんだから。

それに私は知っているんだ。

伊勢君が、麻貴のことを好きなことを。

伊勢君は麻貴が好きで、麻貴は修次君が好きで、修次君は他の誰かが好きで？

そう考えると一番切ないのは、伊勢君かもしれない。

「ジーザス！ジーザス！」のメロディが頭の中を流れる。

そして、「ジーザス！ジーザス！」にもなれない女がここに一人。

なんてあれこれと考えているうちに、スープは完成。
火を止めて、次の行動に移る。

「メモ、メモ」

カバンからメモを出して、スープが出来ていることを書いてダイニングテーブルに置いた。

「これでよし」

あとは片付けをして帰るだけと思ったら、突然腕をにゅと掴まれた。

「……麻貴？」

ばくばくする心臓を抱えながら、その声で私の腕を掴んでいる人物が伊勢君だと知る。

どうやら伊勢君は、ダイニングテーブルの側に置かれているソファで、毛布に包まって寝ていたようだった。

「ええと、私は……」

名乗ったところで、私の顔はともかく名前なんか知りもしないだろうって思い、「麻貴の友人です」と答えた。

「ああ、そう」

途端に私の腕から伊勢君の手がするりと離れた。

見ると伊勢君、腕や体には毛布が掛かっているけれど、首もとはぐるりと寒そうだ。

おまけに、着ているＴシャツもそこらあたりがやけにラフな感じになっている。

「あの。こんなじゃ風邪引きますから」って言って、どうしようかなと思いつつも毛布をぐっとひっぱって首まですっぽりと掛けなおした。

すると「風邪なら、もう引いていますから」って伊勢君は返事をしながらも、その毛布に顔を摺り寄せていた。

……なんか、いつもと感じが違う。
幼い感じ。

「あの。クスリ、飲みましたか？」

「朝、飲みました」

伊勢君がそう返してきた。

「……でももう、夜だし。もう一度飲んだほうがいいですよ」
そう言う「何か食べないと飲めないし」と伊勢君が言ってきた。

「あ、なら、ほら。伊勢君の好きなフカヒレのスープを作ったので、それを飲んでからお薬を飲めばいいですよ」

私がそう言うと、伊勢君はもぞもぞと毛布ごと体を起こしてきた。

目は閉じたままで。

でも、スープを飲む気があるようで、毛布と合体した手で「頂戴」のポーズをしてきた。

「今、持ってきますから」

急いでキッチンへと向かい、そして食器棚からお碗を出してそこにスープを注いだ。

そしてきよろきよろしてお箸を探す。

ぱっと一膳掴んで、お碗と一緒に伊勢君の所へ持っていく。

「伊勢君。はい、スープ」

まずはお碗だけを伊勢君に渡す。

伊勢君がしっかりとお碗を持つのを確認したあと手を離す。

伊勢君は目を瞑ったまま口をつけて、スープを飲んだ。

「……おいしい……」

その一言で、体中が嬉しさで一杯になる。

「ほんと？ お箸も持てるかな？ お野菜とかたくさん入っているから」

伊勢君が目を少しずつあけて、その目線の先にあった私の手元か

らお箸を見つけて取った。

そして静かに、本格的にスープに取り組みだした。

そうだ。薬を飲むときのお水。

コップにお水を汲んでくる。

ダイニングテーブルの上に置く。

そしておなじくそこに置かれていた薬を箱から出して、一回の分量をコップの横に置いた。

さて。

私はどうしましょう。

とりあえず、やるべきことと思い、調理の際に使った道具を洗い出した。

そして一応、と思い、お湯を沸かしてポットに注いだ。

ほうじ茶を見つけたので急須に葉だけを入れて、小さなお盆の上にそれらとお湯のみを乗せた。

そしてそれらを再びダイニングテーブルの上に置きに行くと、伊勢君は再びソファでまるまって毛布と一体化して寝ていて、使ったお椀とお箸はきちんとダイニングテーブルの上に置かれていた。

「お薬も飲んだんだね、偉い」

風邪を治そうとしている伊勢君の姿にほっとした。

伊勢君は、すーすーと寝息を立てながら寝ていた。

そんな姿を見ているうちに、伊勢君がずっと風邪を引いていたらしいのになあ、なんて不謹慎なことを考えてしまった。

そうすれば、そのうちに私の名前だって覚えてくれるかなあ……とか。

「木……」

伊勢君が突然何かをつぶやきはじめた。

「え？」

伊勢君の側に行く。

「木」

「……き」

そう聞きながらどきりとする。

『木谷』つて、名前が出てくるんじゃないかって。

「木は、気持ちいい」

「う……うん？」

寢言？

「スープ、熱いけれど、木の器だと熱くない」

「え、……うん。そうだね」

名前が呼ばれなかったことばかりしながらも、伊勢君の言うこと、そういえばそうだなあって。

こつした木の器でスープを飲むのつて、熱くなくていいよねえとか。

「ありがとう」

伊勢君が目を瞑ったままでそう言った。

そしてそのまま、また静かに眠りだした。

元気になったじいさまと、いつも元気な麻貴と、いつもレポートに頭を悩ませている私のオールキャストで、今日はお店に入っていた。

じいさまは、常連さんのOLさんとなにやらお話しなぞして楽しそうだ。

麻貴も麻貴で、「今日は夕飯おごってもらうんだあゝ」なんて言っていて（どうやらこの間看病した人におごってもらうそうだが、どうも話を訊くと無理やり看病して、無理やりおごらせるみたいだ

った）まあ楽しそうだ。

麻貴の話だと伊勢君もあの翌日にはもう元気になったそうで、私もほっとしていた。

麻貴が「よしっ」と言って珈琲をカップに注ぐと、常連さんの〇さんの所に運びだした。

それと同時に、ギイと重い木の扉が開いた。

ひゅうという風の音がした。

「いらっしやいませ」

レポートから顔をあげて、扉を見ると。

そこには、すっかりいつものポーカーフェイスに戻った伊勢君が立っていた。

麻貴からの言葉だけじゃなくて、実際に元気そうな伊勢君の姿が見られて私は嬉しかった。

「ええと。麻貴ですね。麻

」

焦りながら椅子から立ち上がり、麻貴の方を見る。

「いや。あんた」

そう言つと伊勢君はカウンターの手をついて、こっちに身を乗り出してくる。

「修次も麻貴も、あの日誰が来たかって教えてくれなくてあちこち見当違いな奴等にかまかけて訊いて疲れた」

伊勢君の目がこっちを見ている。

こっち……つまり、ワタクシ、木谷 薫のことを。

「で、知りすぎていた女のアンタ。名前なんだっけ？」

そう訊いてくる伊勢君は、いつものポーカーフェイスを少しだけ崩して笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5290p/>

彼の名前

2011年4月28日12時40分発行